

理由表現の推移と その敬語的運用の変化

— 『岡崎敬語調査』の「荷物あずけ」場面のデータから —

Transition of Reasoning Expression and Change of its Honorific Performance

From the Data of “Checking Baggage”
of “Okazaki Honorifics Survey”

(Ver. 1.0)

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

Comprehensive Research

Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

彦坂佳宣

HIKOSAKA Yoshinobu

平成 27 年 9 月 1 日

1 Sep 2015

理由表現の推移とその敬語的運用の変化

－『岡崎敬語調査』の「荷物あずけ」場面のデータから－

彦坂佳宣

要旨：「荷物あずけ」場面の全三次調査の理由表現にはデ・カラ・ノデの3種あり、初期にはデが多く、やがてカラ、最後にノデへと変化する。デはこの地域の方言、カラ・ノデはいわゆる共通語化による。岡崎市の人口はさして変化しないが、3形式の交替は、岡崎市の人口・産業分布の変化に伴う、方言から共通語への変化である。しかし、同じ共通語のカラとノデの交替はその表現性の違いが関与し、広義の敬語的表現に関わるものと考えた。3種の受給表現、文の諸要素を調べた結果、丁寧表現が多いなか、デは「下さい」「お願い」、カラも「下さい」「頂く」、ノデになると「頂く」「もらう」「～して良いか」「できますか」などへ変化する。デ・カラに多い「相手を為手とする」依頼表現からノデの「話し手を為手とし」聞き手に負担をかけない敬語的表現への変化と見る。この3種の交替と受給表現他の変化は他の場面にも共通し、今日一般の趨勢ではないか。

キーワード：岡崎敬語調査 「荷物あずけ」場面 理由表現デ・カラ・ノデ 受給表現

1. 目的と方法

本稿は都合三次にわたる「岡崎市大規模敬語調査」（以下「岡崎調査」）のデータから「荷物あずけ」場面に現れる理由表現をとりあげ、その形式の推移を整理したうえで、敬語運用上の変容に関わる諸点を考えるものである。「岡崎調査」の理由表現は、伝統的形式のデ、共通語的なカラ・ノデの3種が現れ、その量的推移はデ→カラ→ノデの順に交替する。つまり初期はデが多く、すぐにカラが優勢となり、続いてノデが急増する。この推移は、一見、敬語表現と無関係のように思えるが、本稿は、そこにも広義の敬語運用にかかわる変容が認められること、そしてその要因を地域性、敬語運用上の心性などとの関連から分析する。

この三次にわたる調査の詳細は、既に各所にふれられているので略すが、1953年、1972年、2008年にほぼ共通する調査項目で実施されている。調査年次の間隔に幾らか差はあるが、これをつなぐと50年以上にわたる経年的な変化が把握できることになる。その理由表現の様子と変化模様、またその要因はどのようなものであったろうか。

2. 「荷物あずけ」場面の理由表現

既に理由表現の出やすい調査場面として、「医者」（往診）「席譲られ」「電灯代・新聞代（の請求まちがい）」の回答例などがあり、カラからノデへの交替が共通して見られる。ここでは、そのうちでも理由表現の多い「荷物あずけ」の場合を分析することとした。

2.1 3種の形式とその推移

この場面での理由表現には3種のものがあること、既に触れたが、次のような例である。

・デの例

1. ニモツウ イマカラ ヨソエ イクカラ ジャマダデ ナントカ アズケテ クレンカネ。（第一次調査 被調査者番号 65004）

2. スイマセン チョット スグ モドッテクルモンデ ニモツ チョット オカシテクダサイ（第三次調査 同 0627）

・カラの例

3. ヨータシ シテクルカラ ニモツ アズカッテクダサイ（第二次調査 同 84）

・ノデの例

4. チョット コノアト デカケルノデ ニモツ スコシ アズカットイテイタダケマス
カ (第三次調査 インフォーマント番号 0131)

5. エートー チョット ホカニ ヨージガ アルンデ チョット アズカッテモラッテ
モ イーデスカ (第三次調査 インフォーマント番号 0289)

なおデには、例文 2 のようにモンデもあり、ノデには例文 5 のようにンデもあるが、これらは少数なので、それぞれデ・ノデとして数えてある。また、例文 1 はカラも混じるが、このように複数形式が出るものはそれぞれ数えたので、インフォーマントの人数よりやや多くなっている(率の算定には大きく響かないはず)。ただし、この 3 種形式の述部・文の要素を調べる場合は、文末に影響する理由表現だけを問題とした。この例 1 で言うと、デが述部表現と関連するとしている。

このうちデは広く中部地方にある伝統方言形であり、岡崎地方でも頻用されている。一方、カラ・ノデはいわゆる共通語形であり、岡崎という地域社会の比較的新しい動向を示すものである。さらに、カラとノデには微妙な表現性の違いが永野賢(1988)などにより従来から指摘されており、その差異が敬語表現行動にも微妙に関与していると考えられる。

さて、この 3 種の都合三次にわたる調査の量的推移は図 1 のようである。横軸には各年次調査のインフォーマントを年代により 7 期に分けて配した。これは、西尾純二(2015)第 11 章の、同じ「岡崎調査」のインフォーマントの区分にならった。表 1 がそれである。

表 1. 西尾純二(2015)の分類

() はカテゴリーの回答者数。*印は分析対象外。— は回答者なし。						
期	生年(西暦)	生年(元号)	1953年調査	1972年調査	2008年調査	合計
I	1884-1885	明治17-明治18	*68-69歳(3)	*87歳(1)	—	4
II	1886-1903	明治19-明治36	50-67歳(82)	69-86歳(55)	—	137
III	1904-1921	明治37-大正10	32-49歳(133)	51-68歳(144)	*87-90歳(4)	281
IV	1922-1939	大正11-昭和14	14-31歳(211)	33-50歳(206)	69-86歳(87)	504
V	1940-1957	昭和15-昭和32	—	15-32歳(179)	51-68歳(130)	309
VI	1958-1975	昭和33-昭和50	—	—	33-50歳(102)	102
VII	1976-1993	昭和51-平成5	—	—	15-32歳(65)	65

西尾によれば、この区分は「18 歳間隔にすると、各カテゴリーの年齢層がほぼ一致し、かつ回答者が 50 人を越え、分析の信頼性が確保できる」(231 頁～要旨)とある。本稿では、この「各カテゴリー」を早い年代から順に I 期～VII 期とした(この部分は彦坂による)。そして、表 1 の「*」記のものは少数であり、西尾の場合と同じく、結果として取り上げない。従って、どの形式も第 II 期から始まる。また理由表現の場合、カラの第 VII 期は使用例がない。

次に、縦軸には表 1 の各期の総数を分母とし、デ・カラ・ノデそれぞれの発現数を分子とする比率を示した(100 を掛けると%値となる)。

また、線グラフの区別は、第一次調査を一重線、第二次調査を二重線、第三次調査を三重線とし、3 種の形式は末端のマーカーをデ「●」、カラ「■」、ノデ「▲」として区別した。

図 1 からは次のようなことが分かる。

1. 第一次調査の一重線の形式は、第 II 期ではデが 3 割強を占めるが IV 期へかけて急落し、交替して I 期に 2 割強であったカラが急増するが、これも IV 期にはやや落ちる。ノデは上昇傾向を見せるものの全体には極めて低迷している。なお、これら各期の推移は、図の右になるほど若年層となり、老→若への展開模様となっている。
2. 第二次調査の二重線になると、デは第 I 期 2 割半から IV 期の 1 割にも満たない比率に急落し、カラも一段階高い率を維持しつつも、デと並行的に急落する。対してノデが III 期の 1 割程度から V 期には 3 割強と急上昇していく。これも老→若への変化模様である。

3. 第三次調査の三重線を見ると、もはやデは低迷し1割にも満たない、カラも似て急落傾向であり、ノデひとりがIV期の4割から始まりVII期には5割半にまで昇って行く、驚くべき上昇である。
4. そこで問題は、デの衰退、カラとノデの増加および交替の要因は何かということになる。

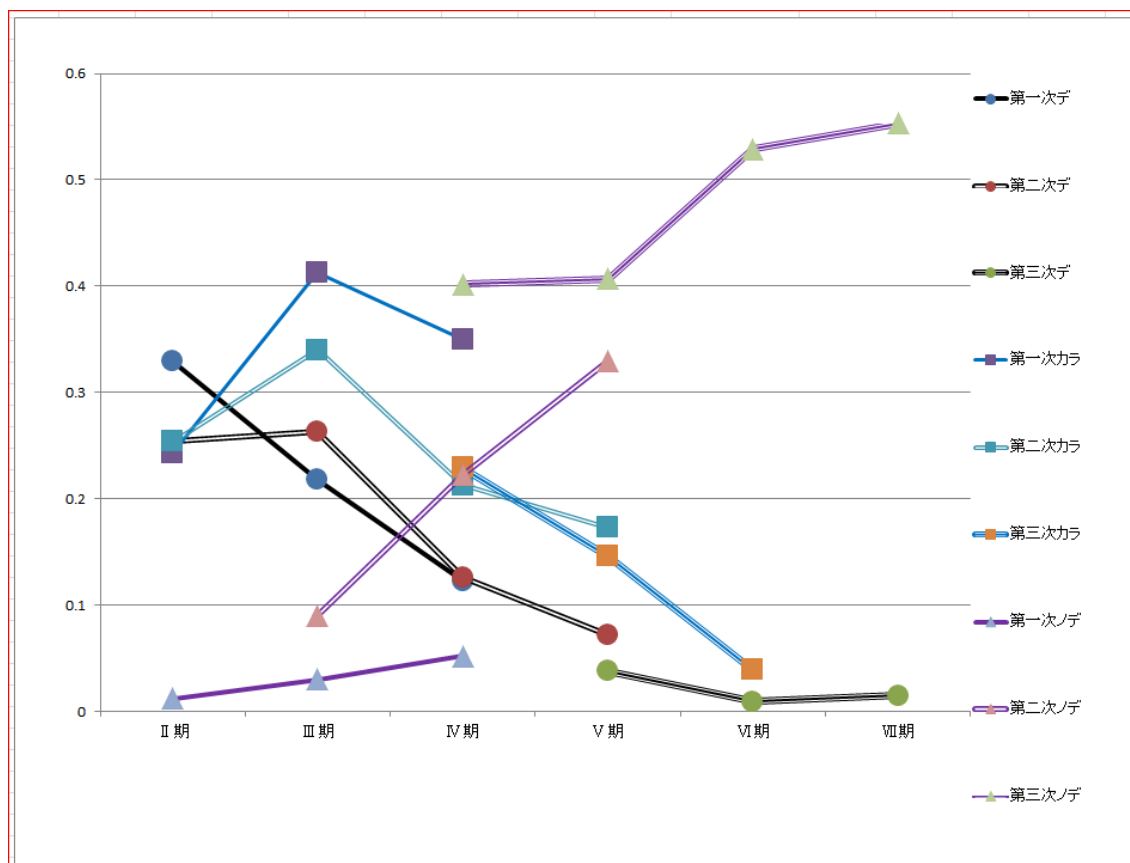


図 1. 全三次調査の3種形式各期の推移

こうしてデ→カラ→ノデの推移は極めて明白であり、第一次調査から50年余りにこれだけの変化を見せている。なお、この推移は、詳細は述べないが、他の「医者」場面その他でもほぼ似ており、文字通り半世紀の変化を語るものである。

2.2 三形式の性差、地域度など

次には、この推移における性差、および地域との密着度について考える。図2-1~3は図1の3形式を個別に取り出し、性別の推移を加えたものである。また、調査の第一次と第三次他に加えた数値は、インフォーマントの出生地情報で、「岡崎市+三河」地域(この地域は伝統方言として理由デの分布)とその他とを分け、前者を地域度の高い組としてパーセント表示したものである。グラフは、図1と同じく、各形式につき第一次は実線、第二次は二重線、第三次は三重線で表し、性別は末端マーカ―を男性は■、女性は▲で区別した。

まず図2-1「デ」の場合を見ると、全体に高→低の推移の中で、第一・二次ともに女性優位が第三次では男性優位になっている。図2-2「カラ」の場合も高→低への推移があり、やはり第一・二次は女性優位、第三次では男性優位に逆転する。図2-3の「ノデ」の場合、第一次は極めて低率で不確定なので措き、第二次を見ると女性優位、第三次ではこれも後に逆転し男性優位となる。これを要するに、使用の初期(デは方言形なので、少しこうは言い難いが)の女性の先導からやがて男性の使用が勝るようになる。

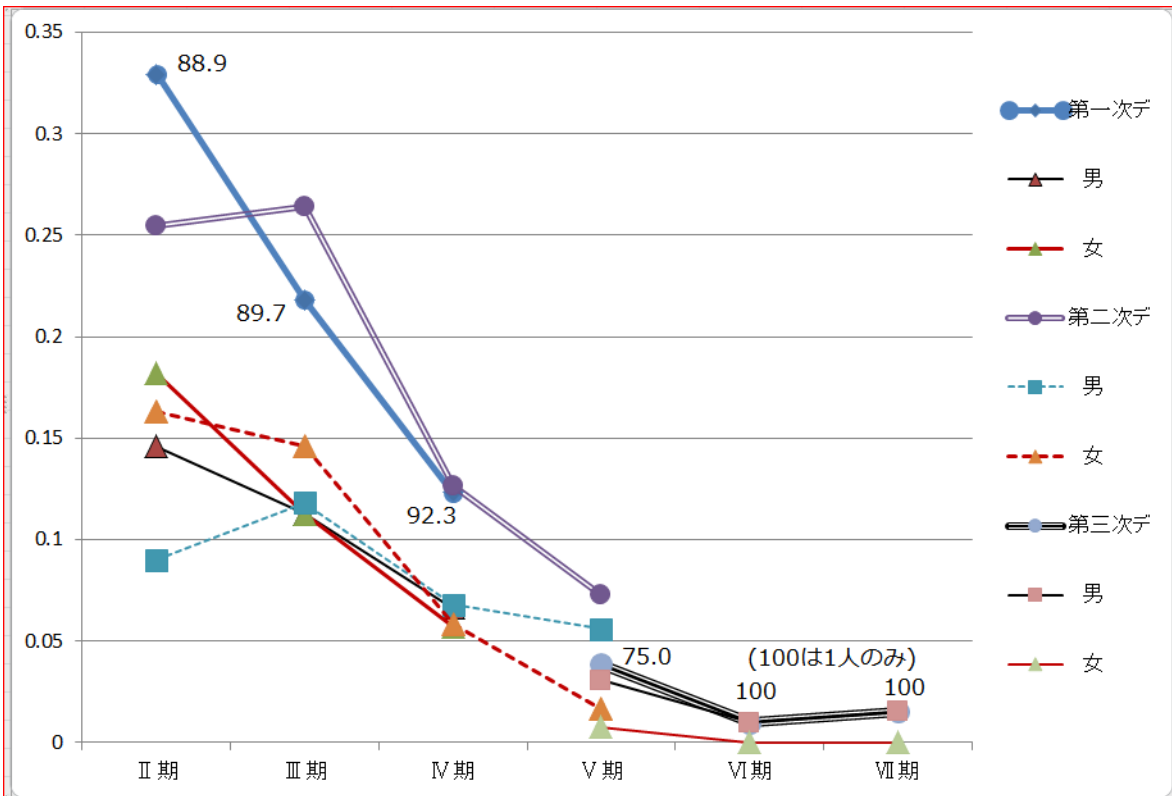


図 2-1. デの性別推移

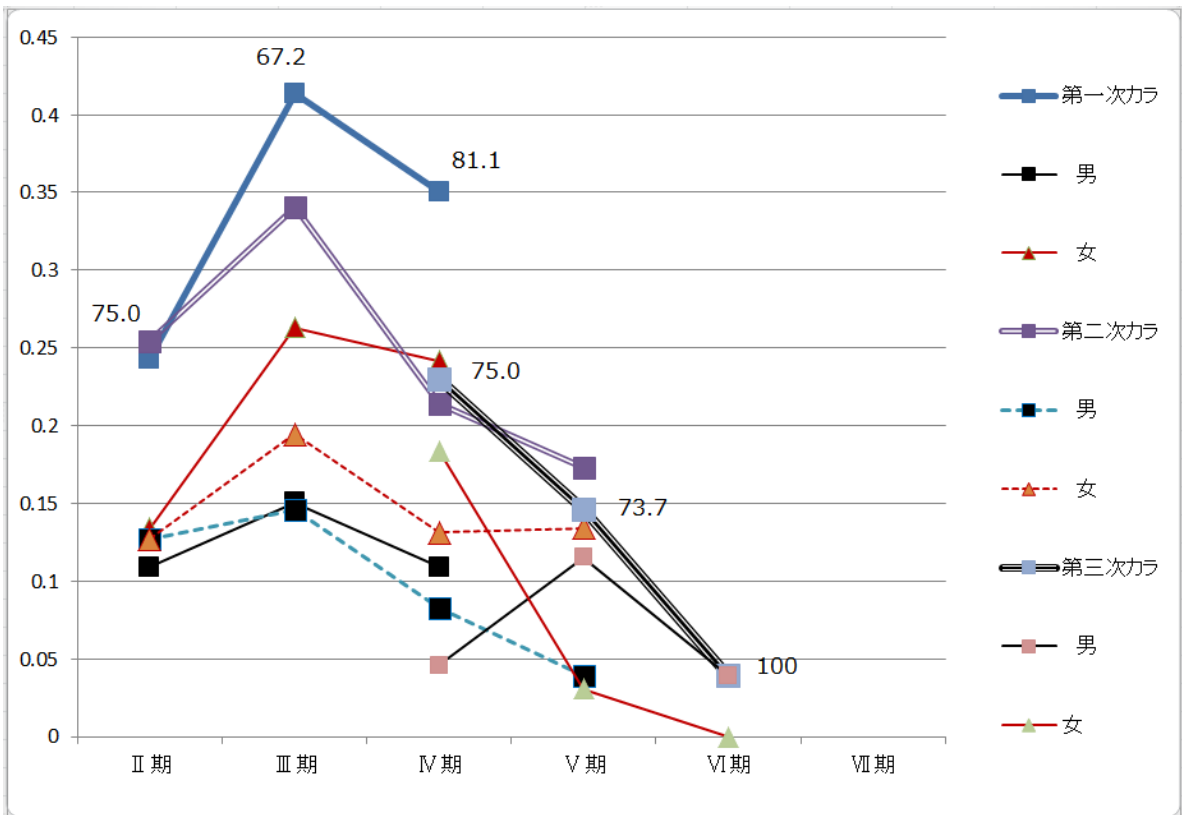


図 2-2. カラの性別推移

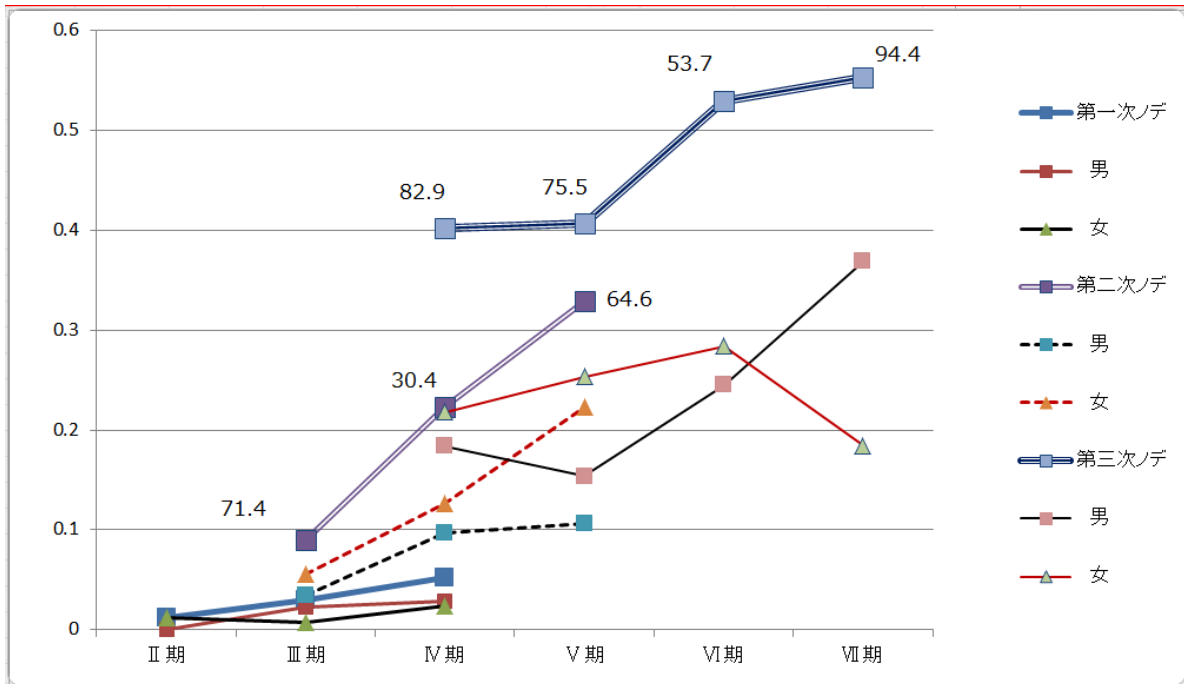


図 2-3. ノデの性別推移

この一般に新しい変化は、幾分かの条件はあろうが、女性側が先行するとされるのと同じ傾向がみられる(なお、阿部貴人・編(2010)表 2-9 ランダム・サンプリングの男女比によれば、第一次～三次の男性比率は 49.4、41.8、52.3 パーセントで、上の評価を左右することはない)。

次は地域性の点を考える。特に注目するのは、デは方言形として早くから使用されるが、カラ・ノデの共通語形式はどのような人々によって使用が始められるか、そして落ち着いた時期ではどうなるかという興味で、これを第一次・三次調査で見る。

「岡崎調査」の属性情報のうち、上の点は生育地が最も関与していると考え、この点を整理し、図 2 類に「岡崎市+三河」出生者数のパーセントを示した。なお、厳密には生育地の情報が重要であるが、個別性が強く複雑なので出生地で代えた。また、他の属性も各期の年齢との対応が難しい点があり一例えば「各種委員」は低年齢層には適用できないなど今回は参照しない。

生育地の数値は、第一次調査では、図 2-1「デ」の第一次の地域率が飛び抜けて高く、当然ながら「岡崎」ないし「三河」で生まれた者がデをよく使用している。次にカラが高く、ノデはデータが少ないので第二次で代用すれば、3 形式の中でまずかなり低く出る。つまり、デが伝統形式で生え抜き者の使用が多く、次に外来者も含めてカラが加わり、ノデが最も遅れかつ外来者の率の高い形で加わる状況が見えてくる(なお、阿部貴人・編 2010 の表 2-8 ランダム・サンプリングの出生地率を見ると、第一次～三次の「岡崎+三河」出生者は 77, 70, 63 パーセントである。この比率を参考にしても、やはり上の判断に大きな誤りはないと思う)。これが最後の調査、第三次になると、デ・カラは使用者が僅かなため 100 パーセント地元出生となり、ノデは数値のゆれが大きいけど第二次より高率になる。このことは、デなど衰退形式は地元出身の者が保守し、続くカラも似て、しかしノデのように新興勢力ではまだやや新規参加者がこの地域にそれをもたらす傾向が残ることを示唆していると考えられる。

性差、また方言形と共通語形の推移を合わせ見ると、女性が新規形式を先導し、かつこの地域に新たに参入した人々によって共通語形がもたらされる傾向が見てとれよう。

3. 「荷物あずけ」場面、理由の言い方での受給表現

次には、これら理由表現が導く帰結句、つまり文末述部の表現を点検する。接続助詞は前件

を受け後件へ導く役割であり、後件の表現に影響を与える。特に理由表現は、どのように理由づけするかで前件と後件の意味的緊密性が強いものと考えられ、この点を点検する。

以下、この分析を2つの視点に分けて行う。第1には、依頼表現に密接な受給表現「やり・もらい」がある。第2には依頼の文表現に関わる他の諸要素を見る。

3.1 受給表現の分析

これには「くれる・下さる」「もらう・頂く」また方言的なチョウダイないしチャー（「頂戴」由来）などがある。そして全て「本動詞+テ補助動詞」の補助動詞の位置にある。

以下、各次調査の様様をレーダー・グラフとして示す。グラフの配置は、時計回りに、12時からデの諸形式が始まり、4時以降がカラ、8時以降がノデに対応する文の諸形式である。

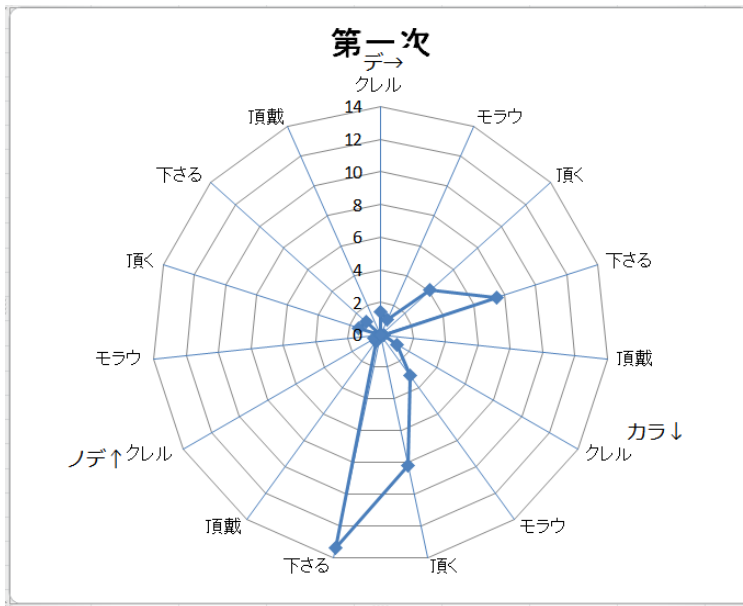


図 3-1. 第一次の受給表現

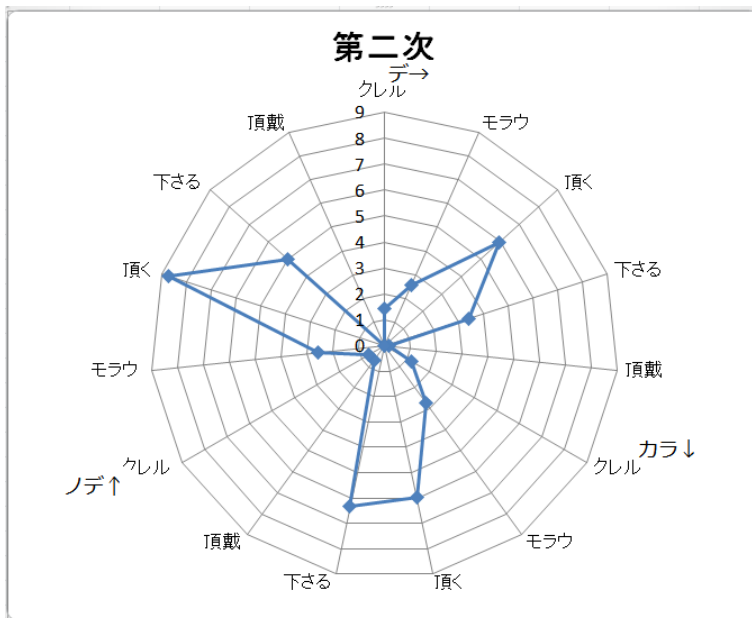


図 3-2. 第二次の受給表現

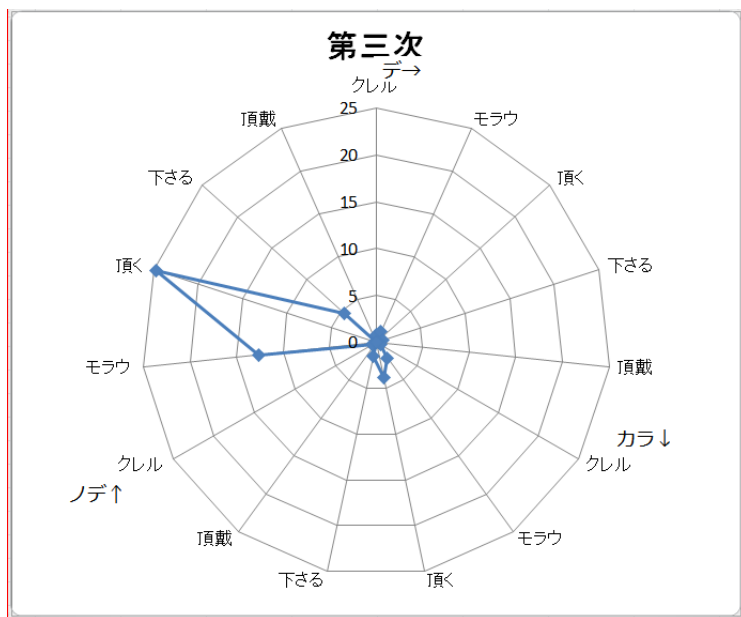


図 3-3. 第三次の受給表現

この3つのグラフからは、次のようなことが分かる。

1. 第一次調査の場合、デに「下サル・頂く」類が多く、カラはこれを上回る形でやはり「下サル・頂く」であり、一方、ノデはその存在事態が少ない。
2. 第二次調査になると、デは低調になるが「頂く」次に「下さる」の順となり、カラはやや増加し「下さる」「頂く」がほぼ拮抗する。なお、第一次調査を含め非敬語形「くれる・もらう」は低調である。
3. 第三次調査になると、デ・カラ自体が極めて低調になり、ほぼノデの独壇場となる(グラフの目盛りも大幅に増加)。そして「頂く」が急増し、「もらう」も増えるが、今まで多かった「下さる」は激減する。

以上によれば、理由形式の交替に加え受給表現の「下さる」から「頂く」「もらう」への変化が見えてくる。

これをもう少し詳しく、推移を見る目的で、注目すべき調査次・期の模様を線グラフで示したのが図4の類である。

デ「下さる」「頂く」の順は、第一次のデの図4-1のグラフが典型的なものである。第一次のデの様子はⅡ期からⅢ期へと下降気味ではあるが、「下さる」と「頂く」がやや高位につけている。

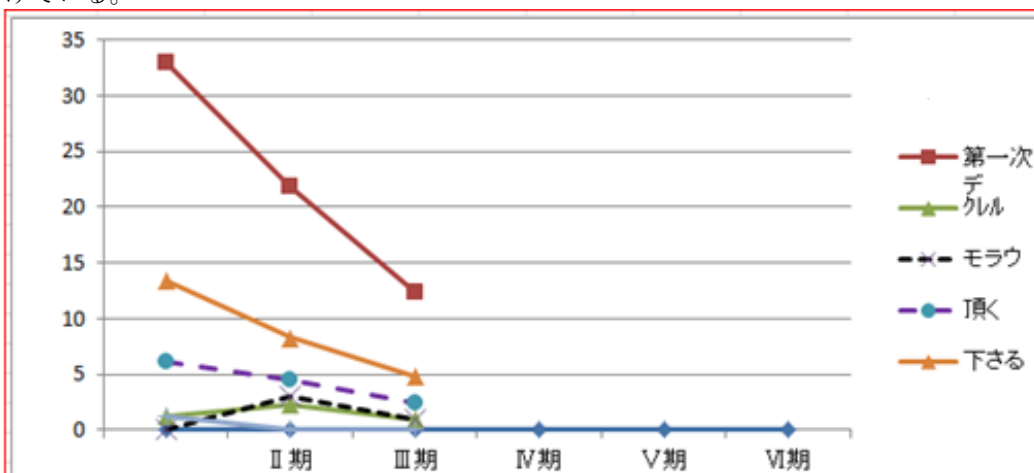


図 4-1. デ第一次の受給表現

第二次のカラー「下さる」次に「頂く」の様子は図 4-2 がそれである。Ⅱ期からⅢ期にかけて、「下さる」と「頂く」がもつれあいながら拮抗している。

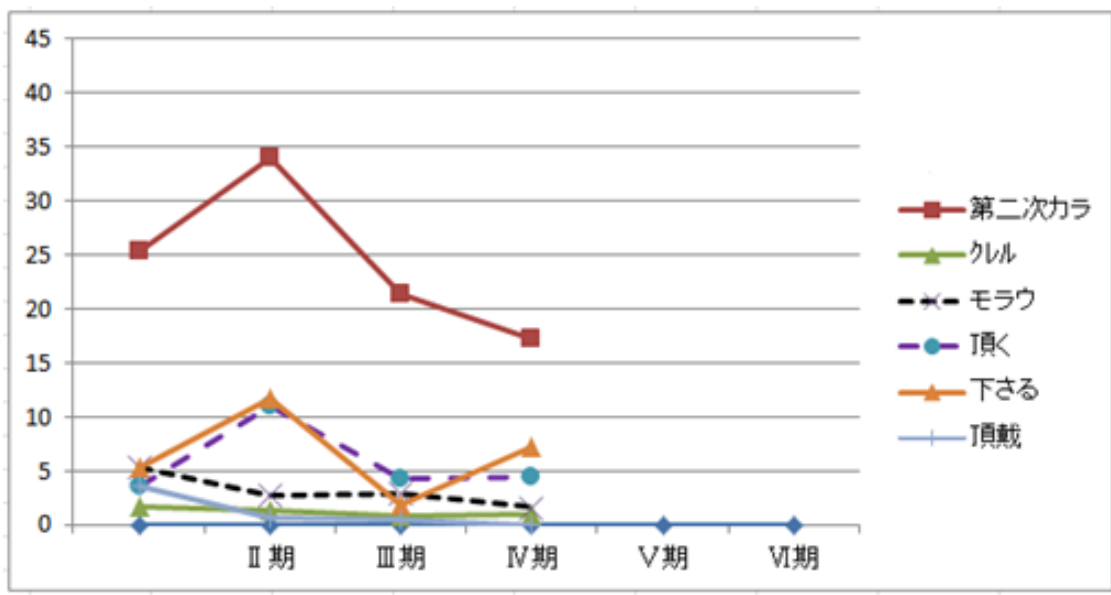


図 4-2. カラ第二次の受給表現

第三次は図 4-3 のようなノデー「頂く」、次に「もらう」がⅣ期からⅦ期にかけて、「頂く」が多いものの「もらう」が逆転する様子がこれに対応する。

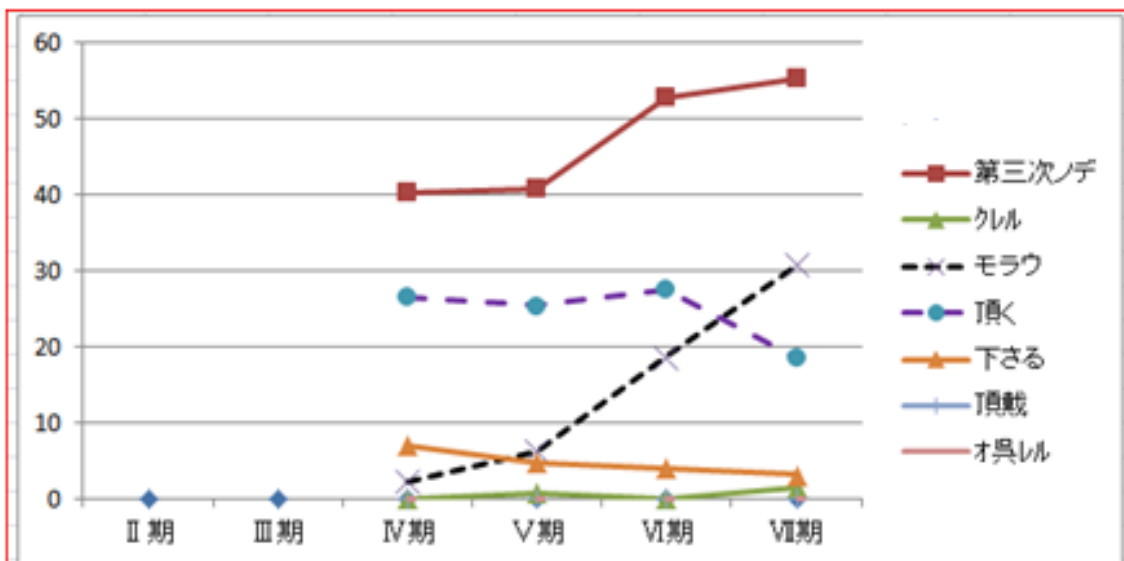


図 4-3. ノデー第三次の受給表現

なお、この逆転は自然の趨勢かどうか判断が難しい。参考までに各期の用例の平均年齢を示した。これから考えると、Ⅶ期での逆転は36歳というやや若い年齢で、「頂く」のような丁寧な表現を避けたか、あるいは新傾向がここに現れ始めたのか、今のところ判断は難しい。

さて、こうした受給表現の「てもらう」「ていただく」が「岡崎調査」において増加傾向にあることは、既に井上史雄・他(2012)の考察があり、これを近代的な敬語使用の特性と捉え、「敬語の民主化・平等化」と位置づけている。本稿では、この評価を認めたくえて、受給表現

の主体に注目すると、「下さる」「くれる」のような相手が為手になる表現よりも、「頂く」「もらう」のような話し手側が為手になる表現が多くなっていることに注目したい。このことが対人関係の調整を円滑にするものと思うが、詳しくは他の諸要素も加えて考える。

3.2 文表現に関わる諸要素の点検

第2段階の分析として、ここでは文表現に関連する諸点を調べる。次のようなものである。

- ・「デス・マス」体の有無
- ・「平叙的な文か命令的な文か」（敬語形式を除く）、
- ・「敬語命令文」—実際には「下さい」が該当
- ・「願う」意味などの形式の有無
- ・「出来たら」など可能形式の有無（ただし、「頂けたら・貰えたら」などは含まず「出来ますか？」など直接的な形式のみ）
- ・「許可形式」の有無—「～してもいいですか、よろしいですか」など

分析は各調査次・各期に亘り整理をしてあるが、煩雑になるので、ここでは特色のある数件を取り出し、それをつなげて推移の様相を見ることとする。

図 5-1 が第一次調査の最初期の模様であり、3 形式のうちデが多く、次いでカラ、ノデは乏しい。そしてデ・カラともにデス・マス文がかなりあり、文型は平叙文が多く、デには「敬語命令文」の「下さい」がよく応じ、「願う」も幾らかある。年齢層は、デ・カラともに 56,6 歳である。

これが同じ第一次調査で年齢層の違う「第一次調査-IV期」の若年層(表 1 参照)、回答文の平均年齢 21 歳前後では、図 5-2 のように大きく変化している。若年層では既にデが激減しカラが優勢になっており、デと同じくカラが「デス・マス」体を取り、「敬語命令文」の「下さい」や「願う」形式をとりながらも、新しく平叙文と否定疑問文が拮抗する様相になる。

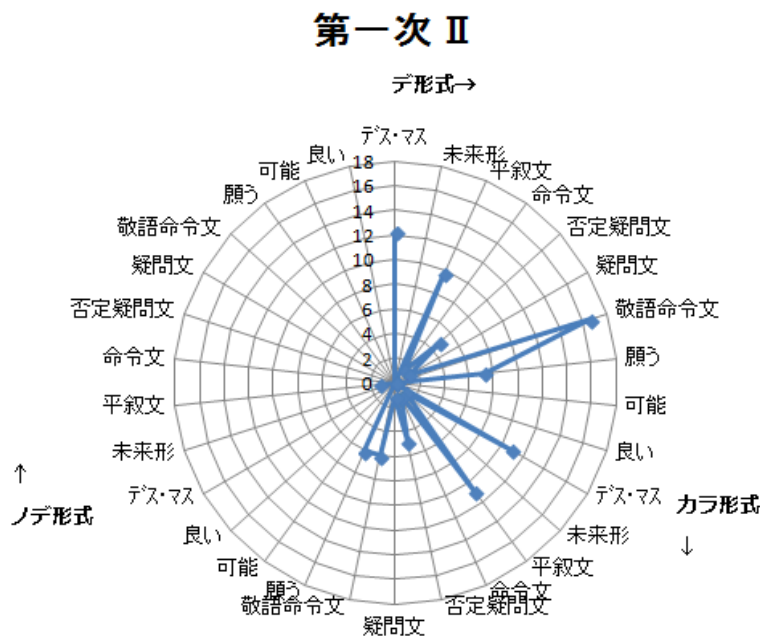


図 5-1. 第一次 II

第一次IV

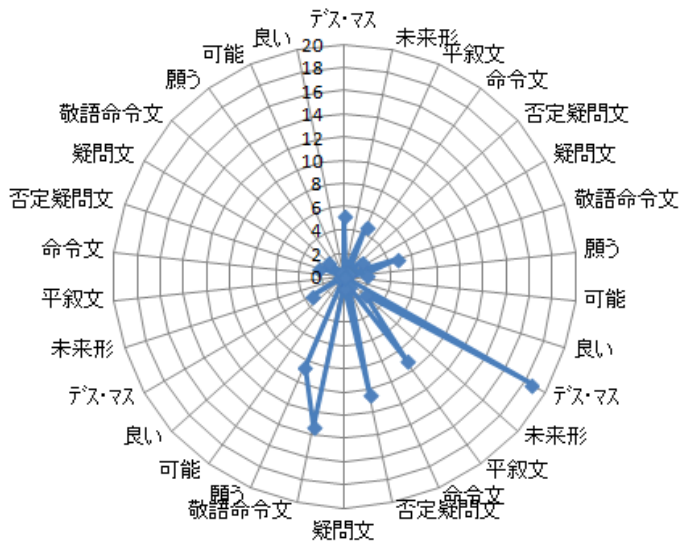


図 5-2. 第一次IV 1

年齢層をもどし、図 5-3「第 2 次－Ⅱ期」の様子を見る。これは表 1 によれば、先の図 5-1 の層の約 20 年後の様子ということになる(勿論、インフォーマントの個々人は違っている)。この期では、デの様相は先に良く似るが、「敬語命令」の「下さる」より「願う」が増える、加えてカラがやや優勢となり、「下さる」の「否定疑問文」が現れ「下サイ」と拮抗する。

第二次Ⅱ

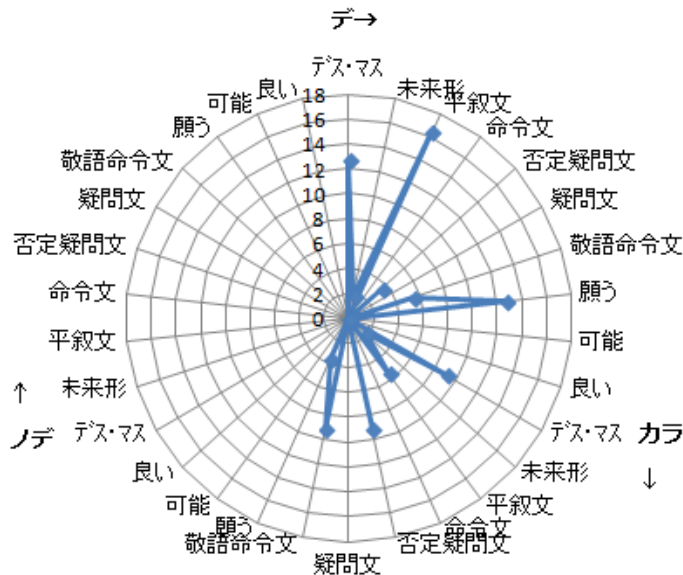


図 5-3. 第二次Ⅱ

次に、「第一次－Ⅳ期」の約 20 年後に相当する、「第二次－Ⅳ期」は、図 5-4 のようである。

第二次 IV

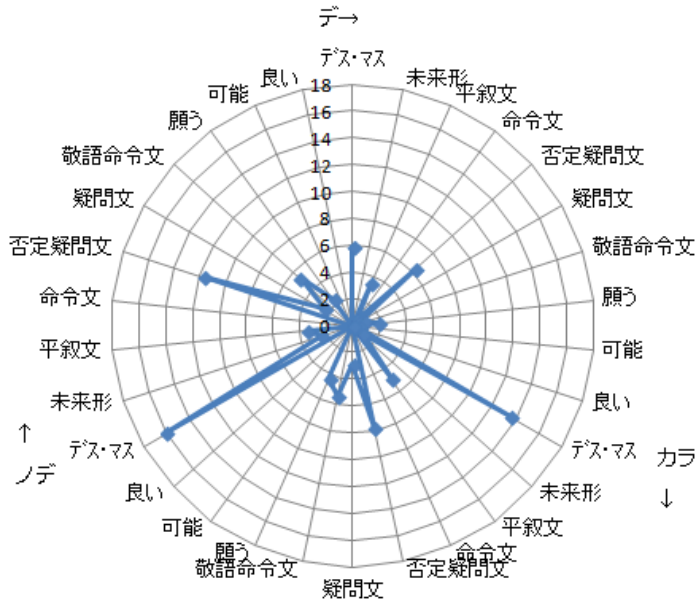


図 5-4. 第二次IV 1

この期の回答者の平均年齢は 41,2 歳である。次第にカラからノデへの移行が始まっており、今までと同じく「デス・マス」体が多いが、その中で否定疑問文(マセンカ類の増加、実はデスは増加低い)が増え、敬語命令形(「下サイ」)は減っている。この様相は、その 36 年後の「第三次-IV期」でも似ているが、「第三次-V期」の 62,3 歳平均になると、ノデに疑問文が多くて「敬語命令文-下サイ」は陰をひそめ、許可の「良い」の言い方がいくらか兆してくる(図示は略)。この様相は、「第三次-VII期」の若年層、回答者の平均年例 25~27 歳層になると一段と増し、図 5-5 のようである。

第三次 VII

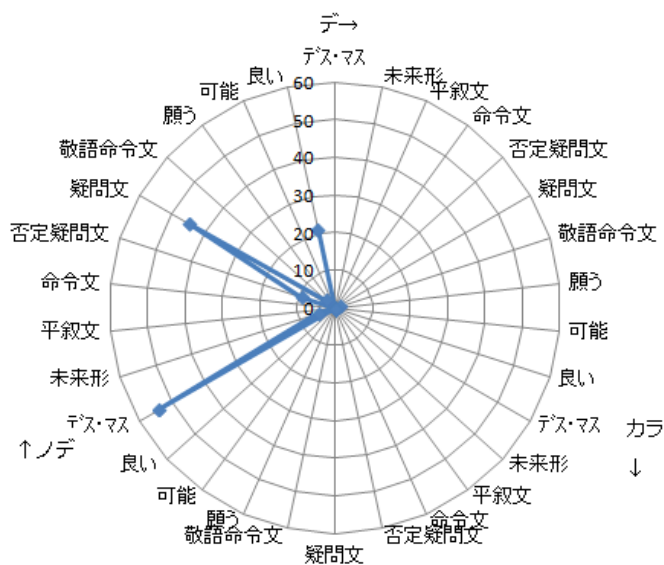


図 5-5. 第三次VII

ノデが圧倒的となり、文型は、「デス・マス」体は当然のこと、他に疑問文型が圧倒的で、敬語命令文「下サル」は影を潜め、かつ許可「良いですか」などが増加している。

以上、デーカラ→ノデの推移は当然として、共通して「ノデ・カラ」文体が多いこと、そのなかでデ・カラなどは「敬語命令形一下サイ」や「平叙的な文」が多いものが、やがてカラからノデへの交替がおこり「下サイ」が減り「頂く」が増え、「否定疑問文」から「疑問文」、また許可の「良いですか」などが増加していく過程が現れる。

4. 3形式の推移と要因など

以上に見てきたデ・カラ・ノデの3形式の推移とその要因などはどのようなであろうか。

4.1 方言的なデの問題

まず、岡崎地方の方言形デについて見る。昭和50年代前半の各地のはえぬき70歳前後の男性を対象にした伝統方言の地図『方言文法全国地図』(以下、GAJ)の略図(彦坂作成)によれば、理由デの形式は中部地方に広く展開し、また近畿地方の周辺部や九州南部にも分布するものである。いま、彦坂佳宣(2005)からその略図を図6とした。

まず、近畿中央に縦楕円のサカイ類がある。その位置からしてこの地域の最新のものであり、それが北陸をへて新潟・山形県付近まで方言化しながら伝播している。江戸期の海運によって伝播したものである。紀伊半島にあるヨッテ類はサカイ類と似た時期で、サカイ類に圧されたものであろう。これら近畿の周辺・外辺には、中部地方にデ・ニがあり、近畿北部にデ、さらには九州南部にデがあり、サカイ・ヨッテ類より一段階前の形式と考えられる。この史的解釈は、中世・近世の国語史研究の小林千草(1973、1977)の研究によっても、分布との対応があり、確実なものと思う。

東日本にはカラが大きな分布を見せている。これは、格助詞カラの「起点・由来」的な意味が理由表現として定着したもので、その出自からして全国的にあり得たが、近畿ではサカイ以下の新形式に圧倒され、対して東日本では旧来からのカラが近畿の新形式の影響を受けずに定着したものと考える。なお、中国・四国にはケニ・ケン・キニなど問題となる形式もあるが、今は触れない。

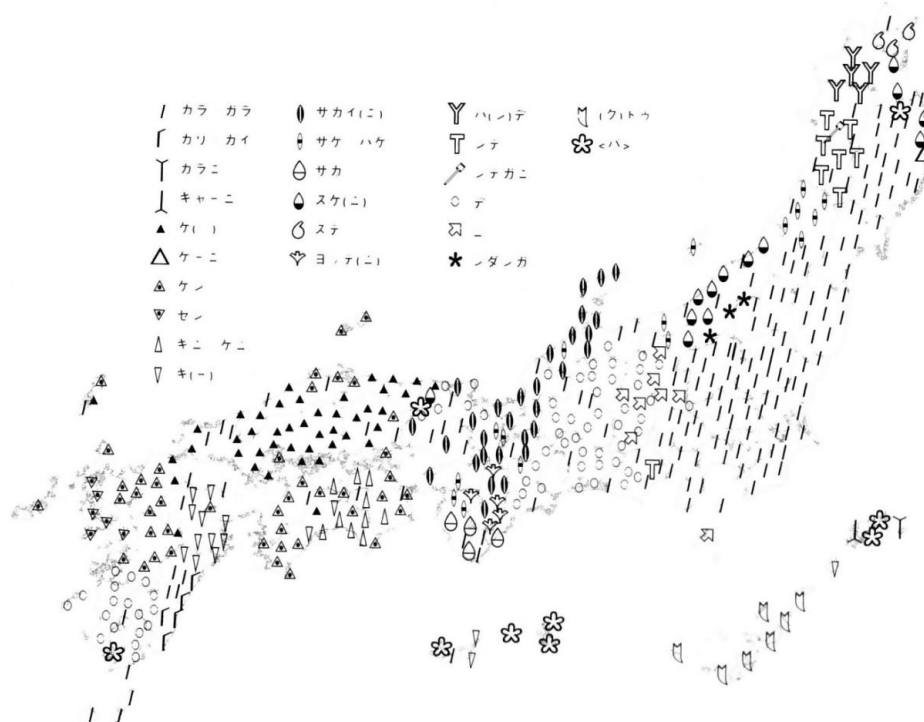


図6. GAJ 第33図「雨が降っているから行くのはやめる」

さて、問題のデは、まず図 6 の中部地方東部にあるニがデに先行するもので、その「ニ+テ」の融合がデであり、地理的な順一ニが近畿から遠く、デは近い一と対応している。これらは、京都語の中古以来、接続助詞として使用され、文脈により理由表現としても現れるものであった。これが伝播して、近世後期の尾張の資料には盛んに現れる。

○きのふも、あんまりござらつせんで、文でもあげふと思つたけれど…(囲われ女→恋人、囲多好鬻)

○(キセルを川に落とし)かねでやで沈むハ (川遊びの男、春秋洒士伝、「でや」はこの地域の断定の助動詞)

これが「岡崎調査」にあらわれるデであり、GAJ では中部地方に広く展開している。江戸末から明治にかけての三河の冠付雑俳で現れる。

○枕元の方灯 アノ始末じやで気に入らぬ アカシブ 文兆 浮草集 嘉永 2 年

○半めし 嫁が姪じやで気が置けぬ ヲバナ 啓玉 花の魁 初編 安政以後

○始末の能い嬢 常が常じやで出はれせる ムツナ 如月 明治千歳集・四 明治 14

作者名に添えられたカタカナは地名で、順に岡崎市南部、西尾市、岡崎市中心近くであり、この地域にかなり長い年代にわたり理由のデが存在したことが分かる。先の図 2-1「デ」はこのような事情にある伝統方言が現れており、地域に密着した者を示す高い数値であるのも頷ける。

4.2 共通語化としてのカラ・ノデの問題

「岡崎調査」の第二次以降はカラ・ノデが盛んになった。その経緯はどう考えられようか。

第 1 には、当然のこと、この地域の共通語化によることが指摘される。それにはこの地域における各種の変容が関与していよう。

阿部貴人・編(2010)より、調査対象数の多いランダム・サンプリングによるインフォーマントの属性のうち出生地を見ると、「岡崎市」に「三河」を加えた地域の率は、第一次～第三次の順に 77.3、70.6、63.0 パーセントであり、順に低くなっている。つまり他地域の出生者が確実に増え岡崎市に入って来ており、旧来の地域共同的社会が変化している。これは第二次から採用された、前次調査からインフォーマントを選んだパネル・サンプルのその第二・三次で 84.3、80.5%となっているのより当然低いが、やはり大きな変化である。一方、岡崎市の人口は都合三次の調査を通じて大きくは変動がない。

職務内容は表 2 のようである(複数回答部分は除いた)。調査地域は岡崎市街を含むため第一次産業は少ないが、次第に第二・三次産業への変化があり、地域社会のあり様が変わっている。

表 2. 岡崎調査ランダム・サンプリング
「職務内容」表(阿部他より抄出)

	第一次	第二次	第三次
専門技術	4.2	5.8	12.7
管理的	1.6	4.8	1.6
事務	7.2	12.8	12.7
販売	10.3	8.3	8.5
サービス	2.3	3.5	6.9
保安	0.5	0	1
農林漁業	3.7	0	1
運輸通信	0	1.5	1.3
生産労務	18.6	12.5	13.1
分類不能	10.5	12	5.9
無職	35.9	29.8	34
NR	4	9	0

このように、他地域出生者が流入し、産業上の分布も近代化し、これに応じて言語活動も近隣になじんだ者同士から、次第に疎遠な人々とも会話する機会が増えてくることになった。これが共通語化の大きな要因であろう。先の GAJ 第 33 図のような地域方言社会の中でも、社会言語学的にみると大きな変種を抱えていることになる。しかし、同じ共通語化といっても、カラからノデへの転換があったことから、この要因も問う必要がある。それには両形式の表現差が手掛かりとなる。

カラとノデの差異は前田直子(2009)に手際よくまとめられているが、やはり先引・永野(1988)の見解が重要である。その要点は、ノデは後件の文末表現が叙述性の強い傾向、対してカラは文末が主観性の強いもので、推量・意志・命令表現などが対応する傾向を指摘し、加えてノデにも丁寧表現では主観的表現をとる場合もあるとする。これを10種の質問文例への回答率をもって実証的に論じている。

永野の丁寧表現のノデは次のような質問文であり、ノデを選択する率はカラをはるかにしている。

○そのことは伺っておりません(ノデ)、私にはわかりかねます。(永野はこれを「拒絶(丁寧表現)」と規定し、ノデ部分が()で、質問文の体裁)

○財布一個拾得してあります(ノデ)、お心当りの方は当窓口までお申し出下さい。(永野では「依頼(丁寧表現)」と規定、以下おなじく質問文の体裁)

また位相面では、婦人雑誌、新聞社説、癖のない文章例として菊池寛『半自叙伝』、日常会話例として雑誌『言語生活』所収「録音器」、また山本有三の戯曲23編を調査し、カラ・ノデの比率は文章・ジャンルにより異なる、かつ全体にカラが圧倒的でノデは少ないとし、また戯曲の会話文ではカラが多く、ト書きはノデの「客観的に説明するためのもの」が多いとする。そして、京極興一(1986)が明治20年以降の小学校国語教科書・児童文集を検討すると途中からノデが地の文の客観的表現で増加するとするのを、自説のノデ＝客観的、カラ＝主観的の表現性の補強になっているとしている。

さて、「岡崎調査」の回答例でもカラとノデの次のような例は、やはり永野説に従うべき表現性の違いがある。

「カラ」の例

○ヨソニ ヨージガ アリマスカラ カエリニ モラッテイキマスカラ アズカッテクダサイ (被調査者No.533 大正13年生まれ)

○スミマセンガ チョット ソコ カイモノシテキマスカラ オカシテクダサイ (同 426 昭和14年生まれ)

○アノヨ チョット ワルイケド コレ ワシ チョット ソコマデ オツカイニ ヨージガ アルカラ チョコット ココエ オイテテチョスカ (同 815 大正14年生まれ)

全体に私意のあらわな表現性が見てとれる。これに対して、似た時代のノデの例は、次の例を見ても比較のおだやかな表現となっている。

「ノデ」の例

○アノ チョット ホカオ マワルノデ カエルマデ チョット アズケトイテ クダサイ (第一次調査 同 18114 大正13年—これはノデの出る初期例、第一次調査より)

○スミマセン チョット ヨージガ アルノデ コノニモツ アズカッテクレマセンカネ (同 482 昭和18年生まれ)

そして、このノデの例は、永野説の、ノデも丁寧表現を伴う主観的表現をとるとする例である。「岡崎調査」で、カラの後にノデが隆盛するのは、この「丁寧表現をとるノデ+主観的表現(依頼表現)」が採用されて成ったものと考えられる。

4.3 3種それぞれの交替時期など

次にこれら3種の交替の時期について考えたい。図1によれば、まず、デは第一次調査の第Ⅱ期ないしⅢ期から減り始め、Ⅲ期にはカラと交替を起こす。一方、GAJで見たデは伝統方言としては昭和期後半にも良く維持されていることから、理屈上は第一次調査での他地域出生者の約3割弱によってカラが外からもたらされた可能性が高い。その場合、西日本出生者6.3パーセントは北海道や関東その他の5.1パーセントより高いが、GAJ第33図で見る西日本形式でなく、やはり標準語形式を持ち込んだことになる。岡崎地方は敬語その他では近畿の影響の東限的な地域であるが、この場合は共通語がよく進出してきている。

次にカラは、同じ第Ⅲ期以降ずっと下降し、第二次調査のⅣ期以降ノデが確実に増加し、同Ⅴ期から第三次調査のⅣ期つまり遡った若い世代ではデ・カラを圧倒する。このⅣ期は表1を見ると大正11年から昭和14年生まれ、言語形成期の15年を足せば昭和30年代までにはノデの流入がかなりあったとの想定が可能であろうか。そしてノデの率が女性から男性へ交替するのは第三次のⅥ期であり、この時期には外来者でなくてもノデが定着していたと想定すると、

その時期は昭和 50 年までに生まれた者、つまり高度成長期ちかくのことであろうか。以上は、あくまで概算上の理屈ながら、こうした社会変化との関連することは確実であろう。伝統方言では GAJ のようにデ専一の分布に比べて、同じ地域でも社会言語学的には多様なあり方によって言語変化が進んでいる。

さて、理由表現の標準語化の経緯は、吉井量人(1977)が参考になる。この論は、江戸語・東京語につき元禄頃以降の理由表現の各種の変化を追い、カラとノデの表現差の原理にも触れるものである。その中で江戸語のカラは 1770 年以降(江戸語の成立期とされる宝暦の直後)急激に増加し、東京語を経て今日の標準語に到る。この点では、岡崎地方でのカラの増加の時期の想定はかなり早くからとしても矛盾はない。

対して、ノデの成立はかなり遅れ、原口裕(1971)によれば近世後期または末期以降、吉井の表によれば昭和期の戦後でも 15 パーセント前後を低迷する状態である。依拠する資料によっても異なろうが、使用率がかなり低いことは確実であろう。先の永野論でも、京極興一(1986)の戦前の国語教科書の調査でも、大正から昭和初期の増加する時期はあるものの、地の文の客観的叙述部分でのこととし、カラの頻度には到底およばないのである。

ところが「岡崎調査」のノデは丁寧語による主観的依頼表現であった。永野論はこの丁寧語を伴う表現ならノデの主観的表現もあり得て、「丁寧表現で柔らげる…接客表現」(69 頁)とする。しかし、永野・京極の対象とする時代にどの程度の率で使用されたか、恐らくかなり低率ではなかったか。両者とも依頼表現を対象にした発言はないので不明ながら、先に永野論で示した、カラに対しノデがどのジャンルでもかなり低率であったことから推測すると、やはり低率であろう。すると、恐らくは今日に近い時期になって「ノデ+丁寧語を伴う主観的表現(依頼)」が盛んになってきたのではないか。

例えば、「少納言」により『書きことば均衡コースパス』の「YAHOO! ブログ・知恵袋」「教科書」「雑誌」を範囲とする検索で現れた 500 件のノデ例(理由の用法以外も含む)によれば、

○年老いてもある程度の範囲で大家業をしたいので色々教えて下さい。(Yahoo! ブログ)

○パソコンにはあまり詳しくありませんのでぜひ皆様の助言をおねがいします。(同)

といった丁寧語をとまなう主観的表現が 1 割弱はあり、殆どが「YAHOO!」関連のものである。また、

○Yahoo! からの通知の連絡先以外とのお取引ですと補償が受けられない場合がありますので」と返事してみてもはどうでしょう。(Yahoo! 知恵袋)

のように、ノデで終わる文も珍しくはない(ただやはり多少の言いさしの感じはあり)。こうした話し言葉的な場面での使用が近年増えてきているのではないだろうか。「岡崎調査」のノデによる主観的依頼表現はこうした動向とつながっているよう。永野・京極の論によるノデの出方はかなり制限が強く、「丁寧表現+ノデ依頼文」が生じて来た時期はかなり後のことのように思われる。こうしたノデ表現の状況は、なお課題として残る。

5. まとめ—社会言語学的な見地から

以上の考察では、次の点を考えてきた。

1. 理由表現形式としての 3 種、デ・カラ・ノデ形式の推移
2. この形式類に受給表現や文表現の各種要素がどう対応するか
3. これと調査対象である岡崎市の社会構造の変化との関連

最後にこれらを総合して、どのような敬語的表現にかかわる面が捉えられるかを考える。

まず上記 1 の形式交代は確実なものであり、他の場面に対する回答もほぼ同じで、方言的なデから共通語化によるカラ・ノデへの変化があった。この経過には上記 3 の方言共同体的な社会から多様な社会への変化が関与したと考えた。

しかし、カラからノデへの変化は、両者の表現性の違いが関与すると考え、上記 2 の受給表現や文表現上の諸要素を分析した。そして初期のデ、中期のカラには、敬語命令形「下さい」、文の諸要素のうち「お願いします」などに対応していたが、ノデはこれに代わって「頂く」「もらう」が増え、文の要素では「お願いします」より許可表現「～しても良いですか」、また幾らか可能表現「～ができますか」への変化が認められた。

こうした変化は、既に西尾純二(2015)で「岡崎調査」の「二重請求」「おつり場面」の考察において確認され、「クレ・クダサイ類からモラウ・イタダク類の交替は、…依頼表現から受益表現への移行であった」「相手に直接働きかけるクレ・クダサイ類から、自分のことを述べて相手に間接的に働きかけるモラウ・イタダク類に、さらには、要求する行為の成立を相手の許可に委ねる表現形式(～テーデスカ)の使用へと、言語表現が間接性を強める方向に変化し続けている」(238頁)と述べている。

この内、表現形式の変化は本稿の「荷物あずけ」の場合もほとんど同様であった。そして、本稿ではこの傾向を、聞き手を為手として働きかける依頼表現から、話し手自身を為手とすることで相手に負担を与えない表現に代え、関係を円滑にしようとする表現行動への変化と捉えてみる。この背後に、地域共同体が変化し、見知らぬ人との言語接触の機会が増え、相手と摩擦を起こすことを極力さける心性が働いていると見る。別に言えば、人と人との関わりを極力間接的にし、特に必要な場合を除き関与度を低くする都市的な動向への変化があったのではないか。西尾の論を参考にすると、この傾向は岡崎市における一般的な傾向のように思われ、さらには今日の日本語表現のあり方一般にも通じるものであろう。

資料

困多好鬚(イタコワゲ)＝洒落本大成、春秋洒士伝＝京都大学所蔵本 浮草集・花の魁＝『新編 岡崎市史 第二章(鈴木勝忠氏執筆)』『明治千歳集』鈴木勝忠氏蔵本
『方言文法全国地図』＝国立国語研究所による。なお略図作成には同研究所「方言研究の部屋」の地図作図プログラム之恩恵を受けた。

参考文献

阿部貴人・編(2010)によれば、『敬語と敬語意識－愛知県岡崎市における第三次調査－』国立国語研究所
井上史雄・他(2012)「岡崎 100 年の『ていただく』増加傾向－受惠表現にみる敬語の民主化－」国立国語研究所論集 4
京極興一(1986)「接続助詞『から』と『ので』の史的考察－小学校国語教科書を対象として－」国語と国文学 63-6
小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表わす条件句」国語学 94
小林千草(1977)「近世上方におけるサカイとその周辺」『近代語研究』5 武蔵野書院
永野 賢(1988)「再説・『から』と『ので』とはどう違うか」日本語学 7-13
西尾純二(2015)『マイナスの待遇表現行動』くろしお出版
原口裕(1971)『『ノデ』の定着』『静岡女子大学国文研究』4
彦坂佳宣(2005)「原因・理由表現の分布と歴史 『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から」日本語科学 17
前田直子(2009)『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
吉井量人(1977)「近代東京語因果関係表現の通時的考察—『から』と『ので』を中心として—」国語学 110

(彦坂佳宣 立命館大学特任教授)

大規模経年調査資料集 **19**

Material for Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

理由表現の推移とその敬語的運用の変化
— 『岡崎敬語調査』の「荷物あずけ」
場面のデータから—

Transition of Reasoning Expression and
Change of its Honorific Performance
From the Data of “Checking Baggage”
of “Okazaki Honorifics Survey”
(Ver. 1.0)

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

Comprehensive Research

Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

著: 彦坂佳宣

HIKOSAKA Yoshinobu

発行:平成 27 年 9 月 1 日 1 Sep 2015

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2 Tel. 042-540-4300(代)

10-2 Midori-cho, Tachikawa City, Japan 190-8561

<https://www.ninjal.ac.jp/>